

沙門はくいの CL 閑話 48(最終回)

乾峯一路

—行動即涅槃—

遠藤博因 hakuin@river.ocn.ne.jp



皆さん明けましておめでとうございます。
今回もまた禅の逸話から始めたいと思います。

ある時、一人の僧が乾峯和尚に問うた
「十方の諸仏はただ一筋の道から涅槃(悟り)に入られたそうです。その一路はいったいどこにあるのでしょうか」
乾峯は拄杖を持ち上げ、目の前に一線を引いて「ここにある」と言った

今回の逸話に登場する乾峯和尚は、あまり詳しいことがわかっていない和尚様ですが、唐代の中国の禅僧ということで理解しておいてください。そこで、ある修行僧が、お経の中に書かれている、「様々な佛は皆一筋の道から涅槃の境地へ入る」というくだりについて、その場所はいったいどこにあるのかという質問をしました。

修行僧はありとあらゆる佛が一つの道から涅槃の境地に入るのだから何か特別な場所があるに違いないと思って質問したという感じです。しかしながら、禅の修行では学問的知識や観念的な世界から離れて、真の自己と向き合うことを目標としています。乾峯和尚は持っていた拄杖という僧侶が使用する棒でただ線を引いてみせ、ここにあると示しました。もちろん、諸仏が涅槃に入る道が乾峯和尚が棒で示した場所であるわけではありません。禅は今この瞬間、瞬間を生き抜かなければいけません。諸仏とは何か、涅槃とは何かしっかり見極めた上での入口を自ら会得しなくてははいけません。乾峯和尚の答えは修行僧に心眼を開かせるためシンプルかつ端的に示したものでないでしょうか。

この修行僧はこの答えに納得がいったのか、いかなかったのか書かれていませんが、次に雲門和尚を訪ね同じ質問をしています。雲門和尚は、持っていた扇子を持ち上げ、「この扇子が三十三天にまで跳び上がって、帝釈天の鼻に突き当たった。すると東海の鯉がひと跳ねし、お盆をひっくり返したような大雨が降った」と突飛押しもない返答をしました。そう言われた修行僧は禅の真意に目覚めたのでしょうか、それともなおさら迷ったのでしょうか、そのことについては逸話には書かれていません。禅の教えは、言葉や文字、概念の囚われることなく、自らが佛となり、ひたすら精進しその努力が即涅槃(悟り)ということになるのです。

補足として涅槃という言葉は聞き慣れない方もおられるかと思われませんが、お釈迦様の死を涅槃と言っております。入滅とか寂靜といった意味で煩惱の火が消えた状態を表しています。そこで悟りとも同じような意味で使われることもあります。またお釈迦様をお祀りされている寺院では、2月から3月にかけて涅槃忌または涅槃会といった法要が執り行われます。お釈迦様が横たわった周囲にあまたの弟子や信者、動物達が集まって死を悲しんでいる様子が描かれた「涅槃図」という軸が掛けられます。機会があれば、気に留めてみてください。

CLにはこのような教えがあります。私たちは行動した瞬間、現実の世界に囲まれます。心配した途端、関心は心に向かってしまいます。不可能なことでも挑戦してみようとしします。達成できそうにない目標でもまた単に道を横切ることで、行動してみようとしします。行動と挑戦してみようという思いは、不可分で逆もまた真であります。『Gateless Reflections by D.K.R』

行動即達成ということではないでしょうか。そして、難しい目標を達成しようという意志でも、道を横切るといった意志でも、それらは同じレベルだということです。難しいことでも、簡単なことでも行動に取り掛かってしまったら同じということではないでしょうか。あれこれ思い悩み心配することは、行動にブレーキをかけてしまいますね。

禅の修行でも、あれこれ考えずひたすら修行に精進することが悟りへの近道でもあり、精進した瞬間悟りなのかもしれません。

今年一年が皆さんにとって、建設的でありますよう祈念しております。

今回も誌面にて皆さんとお会いできるご縁に感謝して

合掌

追伸：この閑話では「無門関」という禅のテキストを取り上げてきました。48則（話）あり今回が最後となりました。年4回なので、12年続けたこととなります。何よりも『季刊CL』を六十余刊継続され掲載の機会を与えて頂いている遠間さんに深く感謝です。（富山県南砺市井波CLインストラクター）

 [目次へ戻る](#)